



夏空や懐かしき人李麗仙	岬鼻の夕日黒ずむ土用かな	水槽に沈む豆腐や原爆忌	谷崎忌虫養ひの葛桜	青岬父といふ字に碇見ゆ	朱の鯉の深きを進む日の盛り	炎天に蝶の分だけ風の立ち	梅雨穂草焔めく川面あるかぎり	登山小屋夜干しのごとく頭を並べ	返しある骨片の銛夏怒濤	ミコノスの鐘はりんどんレモネード	竹節虫に煽りくる風山の坊	八十余年生きて小さき蟬の穴	* 青墨の水のにほひや暁の蟬	空蟬とミニカー同じ持ち方す	午後長き少女の頃やラムネ水	台風はいつも大東亜の生まれ	空蟬の抜けたるあとの気迫かな	悲しみを冷索麵で癒やしをり	遠雷を楽ししむ闇の深さかな	玉葱の腐るやう國腐りけり	貨車列の重低音や熱帯夜	大仏の見おろしてゐる西瓜かな	百人のオーケストラや大噴水	門火焚く妻とふ呼び名なほあるや	さくらんぼあらひざらしの一日かな	天牛や齒列を矯むる銀の枷	吊るまでは風鈴に音立てさせず	大夕立わたしは紙になるごとし	しみじみと夜空を褒むる帰省の子	若林桂子	田中純子	北沢雅子	山崎和之	若槻竹造	河西将	松下千鶴子	田中清夫	土屋敏弘	三品吏紀	渡辺光	曾根原とうこ	関園子	岩上諒磨	鏑木ひろこ	若根原とうこ	関園子	鈴木啓子	関園子	鈴木啓子	木澤つとむ	矢島栄子	竹岡みち子	瓜田紀子	今井愛子	竹村逸子	佐久間梨江	古屋洸	田中優子	宮岡光子	黒沢孝子	川村五子	小林貴子
-------------	--------------	-------------	-----------	-------------	---------------	--------------	----------------	-----------------	-------------	------------------	--------------	---------------	----------------	---------------	---------------	---------------	----------------	---------------	---------------	--------------	-------------	----------------	---------------	-----------------	------------------	--------------	----------------	----------------	-----------------	------	------	------	------	------	-----	-------	------	------	------	-----	--------	-----	------	-------	--------	-----	------	-----	------	-------	------	-------	------	------	------	-------	-----	------	------	------	------	------

巻頭寸言 句集をまとめることは誌友への感謝である。若い時は自力がある。自分が道を切り開く意識が強い。しかし七十歳を越えると、先輩はもちろん、後輩から学ぶ。誌友から教えられることが多くなる。直接ことばを教えられるというのではなく、いい句をみるのが刺激になる。ぼーっとしていられないという、押される気持ちだ。一人では気がつかない多方面からの刺激によって頑張る。特に短詩型の俳句は日常からの気づきが大事なので、その微妙な日常感覚を仲間からの無言の圧力として得て、自分をびりっとさせる。

アンタラ演劇「紅テント」の時代 刺激は地貌から

夏空や懐かしき人李麗仙 小林 貴子  
新宿花園神社境内の駐車場に紅テントを張り始めたアンタラ演劇の演劇(略してアンタラ)「劇団唐組」。主宰の唐十郎が今年五月四日逝去した。発想の契機はそこから。その元妻が李麗仙。在日二世、東京生まれ。抜群の演技力の持ち主。存在感があった。彼女は少し前、二〇二一年六月十六日に逝去、七十九歳。青空のもとでの演劇には当初驚いた。安保騒動後七年経った一九六七年だった。作者は観劇したことがあるのだろうか。俗にいう「男好き」のする俳優であった。「懐かしき」には風雪に堪えた、そんな意味があるろう。そこがいい。

朱の鯉の深きを進む日の盛り 古屋 光  
あざやかだ。真夏の名園の池に棲む堂々たる緋鯉の貫禄。「深きを進む」が作者の眼目である。

炎天に蝶の分だけ風の立ち 佐久間梨江  
暑いさなか、蝶の動きに風を見つけた。繊細な発見がある。一つの見方である。蝶の微かな動きが炎天という不思議な世界をはっと気づかせたのである。表現がお洒落。

登山小屋夜干しのごとく頭を並べ 今井 愛子  
登山小屋だけに、「夜干し」の比喻に存在感がある。みんな一夜干の干物になった気分。今宵かぎりの宿りの律儀なモラルと名残惜しさとが想像されよう。明日は奥穂高岳か槍ヶ岳

今月の秀句

梅雨穂草焔めく川面あるかぎり 竹村 逸子  
作者の竹村逸子は八月三十一日、八十歳で逝去。地味であるが人懐こい微笑を浮かべ、熱心な俳人であった。句歴二十余年。茅野市中大塩在住。生きる芯に俳句が届いていた。

もう動かない、最期に、ご息がハイクと耳元で呼びかけたら身体が動き、反応が返ってきたという。最後までハイクに縋って逝去した。これは凄いいことだ。川面に光があった。(喘ぎとも土用の森の息遣ひ)へ魂の根っこは何処盆用意)も終末の作。これはあらたな生き方だ。最高の最期であろう。

呷鼻の夕日黒ずむ土用かな 川村 五子  
暑い日で、土用の夕日が華やかに沈むのではなく、黒ずむとはすごい。温暖化現象であろうか。見慣れている地の者の発見があるろう。真実を見つける、これも詩人の仕事だ。

水槽に沈む豆腐や原爆忌 黒沢 孝子  
ぎよっとした。亡骸ではない、豆腐である。原爆投下直後であったならば、非常識と非難された句材である。歳月は自由を獲得させる。代わりに、原爆忌も平凡な忌になりつつある。季語がもつ斬新な初々しさがなくなる。季語の劣化である。課題——劣化していく季語をいかに救済するかは新しい例句を詠む以外にない。

谷崎忌 虫養ひの葛桜 宮岡 光子  
「虫養ひ」は巧みな表現だ。一時しのぎの意。虫おさえとも。「細雪」の作家谷崎忌に葛桜を食べた。艶なる情趣がある。句材、表現が見事。意欲的な作者だ。

課題 古語を発掘する

青岬父といふ字に碇見ゆ 田中 優子  
知的なセンスがいい。「父」の字から船が停泊するための「碇」を感じる。白川静の『常用字解』によると、父はハと又とを合わせた字。「ハ」は儀礼用の戌(まさかり・指揮権のシンボル)、「又」は手。指揮を執る意。優子さんの着想は父の字の形、安定感からの着想であろう。なるほどと思う。

岳の夢を見て。ぎょう詰めな山小屋の青春である。

返しある骨片の銛夏怒濤 瓜田 紀子  
「返しある」の些細な釣りの銛の着眼が鋭い。漁師と魚との生存を争う現実が「夏怒濤」の背景に存する。

ミコノスの鐘はりんどんレモネード 竹岡みち子  
エーゲ海のミコノス島。サマーリゾートの盛り上がり「りんどん」の鐘の音で象徴した。ミコノス、レモネードの軽さ、爽やかな鐘の音と清涼飲料の取り合せが楽しい。

竹節虫に煽りくる風山の坊 矢島 栄子  
じつと風の中に身を潜めて枝になりきるななふし。山の坊にもいささかの物語がある。山林に住んだ先人の想像力を楽しむことも、現代人の未来のために必要かもしれない。

八十余年生きて小さき蟬の穴 木澤つとむ  
人生の晩節に、蟬の穴の小ささにしみじみと感動した。空蟬も生きものだ。いのちを育み地中から、例えば七年経て出てくる。そして一週間の命を終える。われもまた蟬か。へ余生とは青春の熾遠青嶺)にも注目した。

歴史は過ぎてもことは記憶に残る不思議 「大東亜」とは

台風はいつも大東亜の生まれ 岩上 諒磨  
今年も台風により日本列島は大揺れである。発生は南の洋上。そこは八十余年前の大東亜戦争の激戦地である。台風は戦争の怨念が執拗にわが花綵列島を襲うのではないか。「大

東亜」とは亡霊のように歴史に渦巻くことばだ。三十一歳の若手が揺すり起こした、忘れられようとしていたことばへの直撃ではないか。見事である。古語になりかかったことばを生かす上述の課題を想起する。

空蟬とミニカー同じ持ち方す 鈴木 啓子

やさしく、大事に、指を曲げてそっと持つ。こどもの宝物。母親のあたたかな視線がここにある。些細なことには違いないが、日常の詩の領域が広がったのではないか。

今日の秀句

青墨の水のほひや暁の蟬 関 禮

私は早朝の寺の写経所を想像した。青墨を摺る。大きな硯に水をそそぐ。大きく息をつき、静かに墨を摺る。やがて青墨の匂いが立つ。水の匂いに気がついた細やかさに感銘したものの、実はここで、私の迷いが出た。「青墨の水のほひ」とは何か。青墨を摺った匂いか。はじめ私は、硯に水をそそぐ、青墨を摺る直前のおいを想像していた。専門家の下諏訪の吉澤清(大淳)先生に伺った。先生からは、「匂いという限りは摺った後の状態を指す」と明快に指摘していただき、了解した。確かに、青墨そのものにも匂いがあるが、「青墨の水のほひ」は青墨を摺る匂いである。「水」が必要かといえ、水により触発される生々しさを言いたかったものとして解しておく。鑑賞はできるかぎり、原句を生かして鑑賞する。ここにも課題がある。

腹にこたえるような迫力がある。保線区勤務の体験詠であろうか。塩尻の九十六歳の作者。

大仏の見おろしてゐる西瓜かな 田中 清夫

大と小、聖と俗。構図がおもしろい。東大寺の大仏ならば、西瓜の供物を薄目を開けた半眼で見下ろしている。野外の大仏ならば、或いは西瓜畑の西瓜までも連想が及ぶ。自由に想像を楽しみたい。

百人のオーケストラや大噴水 松下千鶴子

松本の公益社団法人才能教育研究会がスズキ・メソッドによる百人のピアノ演奏を日本武道館で行った。恒例行事であった。掲句は野外の大きな噴水を囲んでの百人のオーケストラの演奏であろう。爽快さよりも迫力がある。今年の暑さでは演奏者に苦勞さんとお見舞いのことばを送りたくなる。

門火焚く妻とふ呼び名なほあるや 河西 将

作者は九十一歳。奥方はすでに他界へ。盆の門火を焚きながら、この世での呼称であった「妻」が別世界でも通用するのかと、不思議なことに気づいたのである。妻の佛も次第に薄れてゆくことへの気づきであろう。

さくらんぼあらびやひしの一曰かな 若槻 竹造

たくさんのさくらんぼが洗われて箆に盛られてある。輝くさまがどっと読み手に届く。なぜこの光景か。さくらんぼが稔る梅雨時に水害にでも遭ったものか。

天牛や齒列を矯むる銀の枷 山崎 和之

空蟬の抜けたるあとの氣迫かな 関 園子  
蟬の穴ではなく、空蟬そのもの。蟬本体は抜けて殻でありながら怖い。なよなよしていない。前脚の刺が刺さる威力が残っている。地中で蟬を守ってきた気合いがある。

午後長き少女の頃やラムネ水 楠木ひろこ  
夏の日曜の午後に遊園地の売店でラムネを飲んで、あとはどうしよう。友達も限られている。退屈。今のようにスマホもない。暇や隙がいっぱいあった昭和から平成にかけての少女時代。ばかんとした時間が懐かしいのである。

悲しみを冷索麵で癒やしをり 曾根原とうこ  
冷索麵を食べながら泣いているものか。暑い日に冷索麵っておいしいなどと、そっちの方に気が動いていき、気分が変わってきた。若い日の「悲しみ」は気持次第だわとか。

遠雷を樂しむ間の深さかな 渡辺 光  
どこかでごろごろやっている。南佐久の川上村在住の作者。佐久平の真夏、分厚い夜がいい。初々しさが一句にある。

玉葱の腐るやう國腐りけり 三品 吏紀  
原句は「國腐るやうに玉葱腐りけり」。作者の関心は玉葱にあるが、ここは句材の「國」を主眼にすべきであろう。國が腐るとは途轍もなく大きな問題である。日常の玉葱が腐る体験をおつけることで、庶民の鬱憤を吐いた。どうであろうか。意欲作である。

貨車列の重低音や熱帯夜 土屋 敏弘  
熱帯夜に長い貨車と貨車が連結する低い音が連動して響く。

齒軋りでもする子供の矯止か。なぜ天牛か。ぎいぎいという音が天牛の鳴き声に通い、ユーモアがある。真面目なことは遊びがあらう。

吊るまでは風鈴に音立てさせず 北沢 雅子  
南部鉄の風鈴の舌を和紙で包み、音が出ないように包装してある。ふと面白いことに気づいたもの。ピアノのような大物ではなく、音が売り物の風鈴におかしさがある。

大夕立わたしは紙になることし 田中 純子

大夕立の滂沱たる雨と弱い人間のわたしとの対比が一枚の紙の比喩で俄然いきいき。論理で組み立てる説明は無力。感覚による勝手な想像を愉しめばいい。大胆だ。

しみじみと夜空を憂むる帰省の子 若林 桂子

暑い東京から帰省。降るような星空が包む山峡に降り立ち、「この夜空があればこそ」と、ふるさとのすばらしさに感謝した。地貌の発見である。

他に推薦候補作を掲げる。

炎天に繋がるスカイツリー 浮き 山岸 俊一  
遺骨とて果てし地の石八月来 傳田 恂子  
花水あそび足らざる思ひあり 奥山 源丘  
酸欠の金魚の気分世界病む 野口美智子  
滴りや特攻艇の在りし洞 齊藤すみれ  
使ひ継ぐ鍬の刃光る広島忌 荻原 昭廣  
砂日傘砂に引き擡る夕日かな 佐藤 きく